

『易経』とは
——時と兆しの専門書

『易経』というと、占いの本というイメージをお持ちの方が多いかもしれませんが、「四書五経」のうち「書経」と並んで最も古いこの『易経』には、確かに占いの方法も書かれています。しかしもっと根本的かつ簡単にいうと、『易経』は「時と兆しの専門書」です。

ここでいう「時」は、何月何日ということではありません。時（時間、タイムング）、処（環境、状況）、位（立場、人間関係）という三つの要素から成り立つ「時」です。

また「兆し」については、同じ読み方の「萌し」と比べて説明すると分かりやすいと思います。例えば二月の立春を過ぎて風が暖かくなり、梅の花のつぼみが膨らめば、もう春が近いことは誰の目にも明らかです。そういう変化を「萌し」といいます。

「兆し」は例えていえば、十二月の冬至の日を境に陽転し、陽が長くなり、少しずつ春へと向かっていきます。しかし、本格的に寒さが厳しくなるのはそれ以後。一月の小寒・大寒を経て、ゆつくりと暖かくなっていきますから、冬至に季節が転換したことは、暦の上では知ることはできて、普通はなかな

『易経』に学ぶ 節の越え方

古来、君子の哲学書として読み継がれてきた『易経』。

そこには人生で訪れる様々な「時」への対処法が書かれている。

君子が志を成し遂げていく様を

龍の六つの成長過程に準えた「乾为天をきつかけ」として『易経』に魅せられ、

以来研究を続ける竹村亜希子さんに、

『易経』にみる節の越え方をお話しいただいた。



『易経』研究家

竹村 亜希子

たけむら・あきこ 愛知県生まれ。
『易経』に基づいて、企業の社長や管理職にアドバイスをを行っている。『易経』に学ぶ企業経営術「易経とコンプライアンス」『易経』からみた成功と失敗の法則』などをテーマに、全国で講演活動も展開中。著書に「リーダーの易経——時の変化の道理を学ぶ」がある。